

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-10- (2面)
- ・栃木県産開拓ホウレンソウ出荷開始 (3面)
- ・農業危害防止運動始まる (4面)
- ・ナシ・リンゴ 白紋羽病の温水治療 (5面)
- ・泌乳中・後期牛に35%給与 たちすずか (6面)
- ・養豚経営安定対策事業新算定方式 (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

開拓情報

発行所
 公益社団法人全国開拓振興協会
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
 TEL 03-3586-5843
 FAX 03-3586-5846
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

TPP 産業と雇用に甚大な影響

大学教員の会が独自に試算

全国の大学教員ら約900人による「TPP参加交渉からの即時脱退を求め大学教員の会」は、TPP（環太平洋連携協定）参加の影響についての独自の試算を発表した。農林水産業のみならず関連産業を含めた生産減少額は、10兆5000億円、雇用は、農林水産業で146万人、関連産業を含めれば190万人の減少、農作物8品目に限った農業所得は、全国で3483億円が減少すると試算。TPP参加による影響が甚大であることが示された。

「TPP参加交渉から即時脱退を求め大学教員の会」は5月22日、TPP交渉参加問題で国民に豊富な情報を提供するのを目的に、参加の影響について独自に試算し、その結果を発表した。それによると、TPP参加により、農林水産業の雇用には大きな影響をおよぼすことが浮き彫りになった。政府は3月15日、TPPに参加し、農林水産物33品目の関税を撤廃した場合の生産減少額は約3兆円という試算を発表している。内訳は農産物が19品目で約2兆6600億円、林水産物が14品目で約3000億円。しかし、関連産業への波及やその結果、①農林水産物の生産減少により、全産業の生産減少額は、約10兆5000億円にのぼる、②農林水産物の生産減少は、所得減少、消費縮小につながり、さらに生産が減少し、減少額は約3兆4700億円になる、③雇用への影響は、農林水産業で約146万人、関連産業で約44万人、合計約190万人の雇用が減少する、④GDP（国民総生産）に与える影響は、約4兆8000億円の減少になり、GDPを1・0ポイント下げる⑤生産減少、就業者数減少による家計消費の減少額約2兆7000億円となりGDP1・0ポイント下のうち0・6ポイントとなる（表1）。

具体的農業所得の減少額も試算している。8品目（米、小麦、大麦、牛乳製品、牛肉、豚肉、鶏肉、鶏卵）について農水省統計資料を参考に、生産額減少を所得減少に置き換えて試算したもので、全国で8品目だけで農業所得が3483億円減少（所得率11・9削減）と試算。品目別の所得減

合計約190万人の雇用が減少する、④GDP（国民総生産）に与える影響は、約4兆8000億円の減少になり、GDPを1・0ポイント下げる⑤生産減少、就業者数減少による家計消費の減少額約2兆7000億円となりGDP1・0ポイント下のうち0・6ポイントとなる（表1）。

者、開拓農業の支援をすすめるため、講演会、海外研修、全国開拓青年女性研修会、開拓情報の発行等を計画している。

第1回定時総会開催

当協会

当協会は、6月20日午後1時から三益堂ビル石垣記念ホールで、第1回定時総会を開催する。提出議案は、第1号議案「12年度収支決算書等の承認の件」、第2号議案「13年度役員報酬決定の件」の2議案。

第68回通常総会開催

全日本開拓者連盟

全日本開拓者連盟は、6月20日午前11時から三益堂ビル石垣記念ホールで、第68回通常総会を開催する。

TPP 全中が米国に意見提出

TPP 全中が米国に意見提出

全中の萬歳章会長は、6月7日、米国通商代表部（USTR）が行った日本のTPP交渉参加に関するパブリックコメント（2回目）に対して意見を提出した。意見の主な内容は次のとおり。米国などが日本の交渉参加を承認したことは遺憾。農林水産物を除外できない場合、脱退すること

13年度収支予算について、第4号議案「13年度役員報酬の決定について」、第5号議案「13年度会費の額及び徴収方法決定について」の5議案。

BSE 無視できるリスク国に認定

牛肉の輸出拡大期待

OIE（国際獣疫事務局）は、フランスで開催中の総会において5月28日（現地時間）、日本をBSE（牛海綿状脳症）の発生リスクが最も低い「無視できるBSEリスク」の国に認定した。OIEはBSEの発生リスクを①無視できるリスク、②管理されたリスク、③不明なリスクの3段階（ステータス）に分類している。「無視できるリスク」の認定要件は、

BSE検査月齢再緩和

国内検査は48カ月齢超に

薬事・食品衛生審議会は5月31日、国内のBSE検査対象月齢を現行の「30カ月齢超」から「48カ月齢超」に引き上げる方針を了承した。厚労省は、6月3日に検査月齢緩和に合わせた関係省令を改正し、7月

13年度収支予算について、第4号議案「13年度役員報酬の決定について」、第5号議案「13年度会費の額及び徴収方法決定について」の5議案。

表1 政府試算と大学教員の会試算の比較

	政府統一試算	大学教員の会の試算
生産減少額	農林水産業 約3兆円	全産業 約10兆5400億円 (農林水産業 約3兆4700億円)
関連産業への波及	試算せず	約7兆円
雇用への影響	雇用数全体は関税撤廃前と不変	全産業で約190万人減 (農林水産業で約146万人減)
GDPの増減	約3兆2000億円増 0.66%増	約4兆8000億円減 1.0%減

表2 農業産出額ならびに所得額の減少率

品目	生産額ベース				所得ベース		
	全農作物の農業産出額	うち対象品目		農業産出額の減少率	全農作物の生産農業所得	所得の減少額	所得の減少率
		産出額	割合				
(8品目計)	(億円)	(億円)	(%)	(億円)	(億円)	(%)	(%)
全 国	84,593	43,267	51.1%	20,832	29,258	3,483	11.9%
北海道	10,129	5,729	56.6%	3,329	3,579	559	15.6%
(畜産部門)							
全 国	84,593	24,444	28.9%	11,328	29,258	957	3.3%
北海道	10,129	4,154	41.0%	2,337	3,579	224	6.2%
宮 崎	3,114	1,595	51.2%	764	934	44	4.7%
鹿児島	4,060	2,205	54.3%	987	1,146	119	10.4%
(米部門)							
新 潟	2,720	1,286	47.3%	345	1,027	97	9.5%
富 山	656	466	71.0%	230	218	57	26.3%
石 川	554	301	54.3%	149	187	37	19.8%
福 井	452	301	66.7%	149	177	45	25.6%

(注1) 全農作物の農業産出額ならびに生産農業所得は、農水省「生産農業所得統計」より06年～10年までの5年平均である。

大豆 生産量過去最高を予測

米国農務省 今年度需給見通し

農水省によると、米国農務省は5月10日(現地時間)、13/14年度(13年9月~14年8月)の第1回世界および主要国の穀物・大豆に関する需給見通しを発表した。

それによると、同年度の穀物全体および大豆の生産量は、前年度より増加して消費を上回り、期末在庫率は上昇すると予測している。

世界の穀物全体の生産量は、史上最高の24億3千5百万トン(同9・2%)と見込み。世界全体の消費量は、史上最高の20億7千5百万トン(同12・4%)と見込み。世界の消費量は米国で飼料用およびエタノール需要の増加や中国などで増加が見込まれることから、史上最高との見込み。世界全体の生産量は消費を上回り、期末在庫率は前年度より増加の見込み。

大豆の生産量は、史上最高の1億5千463万トン(同23・3%)と見込み。世界全体の消費量は、史上最高の1億7千496万トン(同20・0%)と見込み。世界の大豆の生産量は、米国で前年度と比べて大きく増加(同12・4%)と見込み。世界の消費量は、史上最高の1億7千496万トン(同20・0%)と見込み。大豆の生産量は消費を上回り、期末在庫率は前年度より増加の見込み。

期末在庫率は前年度より増加の見込み。
【生産量】9億6594万ト(同12・7%)増、消費量1億9億3674万ト(同8・4%)増、期末在庫量1億5463万ト(同23・3%)増、期末在庫率16・5%増(同2・0%)増

【生産量】2億8550万ト(同6・1%)増、消費量2億7018万ト(同4・4%)増、期末在庫量7496万ト(同20・0%)増、期末在庫率27・7%増(同3・6%)増

全頭検査の見直しに意見集中

厚労省などBSEリスクコミ

厚労省、消費者庁、内閣府食品安全委員会は5月21日、都内でBSE(牛海綿状脳症)対策の見直しのリスコミュニケーション(説明会)を開催した。消費者、畜産関係者ら百数十名が出席した。

消費者庁は見直しの経緯、食品安全委員会は「国内措置のBSE検査局」総会で日本が「無視対象月齢を48ヵ月齢超に引き上げても、人への健康影響は無視できる」とした5月13日の答申、厚

厚労省は、①BSE検査対象月齢を7月1日に現行の「30ヵ月齢超」から「48ヵ月齢超」に引き上げ、自治体への検査費用の補助金も見直す、②自治体に全頭検査の一斉見直しを要請している、③OIE(国際獣疫事務局)総会で日本が「無視対象月齢を48ヵ月齢超に引き上げても、人への健康影響は無視できる」とした5月13日の答申、厚

意見が出された。同省は「食品の安全規制は、科学的根拠によりリスクを評価するべき」と「飼料規制などの対策は継続する」「SRM(特定危険部位)の除去の範囲の変更はない」「自治体が開催する説明会に講師を派遣し、消費者などに安全性を説明する」と答えた。

宮崎で鳥インフル抗体確認

ウイルス検出されず

宮崎県は6月3日、5月下旬に実施したモニタリング検査で、川南町の養鶏場1戸の2羽に鳥インフルエンザH5型の抗体が確認されたと発表した。

宮崎県は6月3日、5月下旬に実施したモニタリング検査で、川南町の養鶏場1戸の2羽に鳥インフルエンザH5型の抗体が確認されたと発表した。

宮崎県は6月3日、5月下旬に実施したモニタリング検査で、川南町の養鶏場1戸の2羽に鳥インフルエンザH5型の抗体が確認されたと発表した。

今夏の電力需給対策決まる

政府はこのほど、電力需給に関する検討会合で、13年度夏季の電力需給対策を決定した。

政府はこのほど、電力需給に関する検討会合で、13年度夏季の電力需給対策を決定した。

政府はこのほど、電力需給に関する検討会合で、13年度夏季の電力需給対策を決定した。

食料農業 知ってほしい話

第10回

穀物は自給が国家の基本

東京大学教授 鈴木宣弘氏

あきれる農業所得倍増論



安倍総理の最近の様々な政策目標は、ほとんど根拠のないアドバルーンで、あまりにも空虚である。「10年で農業所得倍増」計画にも驚くしかない。TPPを受け入れて所得倍増とはどういうことか。輸出を倍増すればと云うが、輸出を倍増してはじめても、輸出で経営が成り立っている農家は少ない。せいぜい売り上げの数%である。だから、かりに輸出が2倍になっても、所得が倍になるわけがない。輸出を伸ばす努力は必要だが、TPPで安い輸入農産物が洪水のよう

に押し寄せてくれば、輸出を伸ばす前に国内需要を奪われて経営が成り立たなくなる。そもそも農業のみならず、日本経済全体で見ても、日本は貿易立国だからTPPで輸出を伸ばさないといけないといわれるが、TPPで輸出がた人の所得が倍になったら、それが所得倍増の達成だといえるだろうか。そこは、伝統も、文化も、コミュニティもなくなつた荒野だ。それが日本、地域の繁栄なのか。今だけ、金だけ、自分だけ、すべての分野で、ごく一部の人の目先の利益を拡大できれば、あとはどうなってもかまわないという、いまの政治

教授)が、植物の持つ抗酸化物質「フィトケミカル」は太陽光をしっかりと浴びた露地野菜に豊富だと指摘している。また、園芸作物などに特化してあげればよいというオランダ型農業の欠点は、園芸作物だけでは、不測の事態に国民にカロリーを供給できない点である。ナショナル・セキュリティ(国家安全保障)の基本は穀物なので、穀物自給率を保つことが重要なのである。オランダはEUの中で不足分を調達できるから、このような形態が可能という見方もあるが、実は、EU各国は、EUがあっても不安なので、一国での食料自給に力を入れている。むしろ、オランダがいびつなのであり、これはモデルにならない。

他方、大規模な電源脱落などが発生した場合に電力需給がひっ迫する

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

栃木県産開拓出荷開始

栃木県産開拓高原ホウレンソウの出荷が始まった。今年の出来栄は、気温低下の影響で生育が悪く、例年より出荷が1週間程遅れたものの、えぐみが少なく、みずみずしいものに仕上がった。5月29日、栃木県開拓那須塩原市や日光市、那須町などの開拓地で生産する安全・安心でおいしい一杯の高原ホウレンソウをアピールするたため、県や市、町とともに行ったもの。



セリ台で挨拶する櫻井組合長



グリーンスムージーを売買参加者に提案

県開拓などの職員は午前5時45分から、同市場内で売買参加者にホウレンソウのおひたしやグリーンスムージー(緑の葉野菜と果物と水を一緒にミキサーにかけたもの)を提供した。

前5時45分から、同市場内で売買参加者にホウレンソウのおひたしやグリーンスムージー(緑の葉野菜と果物と水を一緒に

出荷ができるようになり、出荷します。これからは、出荷しやすくなります。その後、3班に分かれて都内のパートなどの店頭で高原ホウレンソウの試食・販売を行った。

上野のデパート内にある「九州屋」では、塩原開拓の生産者、君島貴夫さんを始め、全開拓の職員らがホウレンソウの試食を勧め、北海道の生産量は引き続き前年度を上回って推移するものと推測。その結果、全国では第1四半期は前年度をやや上回るもの(同0.3増)、第2四半期は下回る(同1.1減)と見込んでいる(表)。

上期の生乳生産0.4%減

Jミルク 生乳等需給見通し

一般社団法人Jミルクは5月22日、13年度上半期(4~9月)の生乳および牛乳乳製品の需給見通しを公表した。3月までの実績にもとづいて、1月に作成した見直しを修正したもの。それによると、1月に公表した見通しを下方修正し、全国の生乳生産量は382万6000ト(前年同期比0.4%減)と見込んでいる。

引き続き前年度を上回って推移するものと、都府県では下回って推移するものと推測。その結果、全国では第1四半期は前年度をやや上回るもの(同0.3増)、第2四半期は下回る(同1.1減)と見込んでいる(表)。Jミルクは、当面の対応として、夏季の需要期に向けた生乳生産量確保のために、暑熱対策などを徹底し、生乳生産量の低下を最小限にとどめる対策が重要としている。

荒川 武志さん

全国開拓農業協同組合連合会元生産事業部長で同元顧問の荒川武志さんは、5月27日亡くなった。享年77。

人事異動

全開連

(5月1日付)
▽管理部付・全国開拓振興協会出向(管理部) 上野仁史

全国開拓振興協会

(5月1日付)
▽開拓情報部(全開連管理部) 上野仁史
▽開拓情報部長(開拓情報部) 藁谷芳

開拓組織の動き

6月後半から7月にかけて予定されている、開拓組織および関係機関・団体などの行事は次のとおり。

6月

18日 埼玉開連第65回 通常総会

19日 全開連第7回理事

会 全国開拓振興協会 第2回理事会

全日本開拓者連盟 第1回中央常任委員

会 20日 全日本開拓者連盟第68回通常総会

公益社団法人全国開拓振興協会第1回

定時総会

21日 肥後開連第5回通常総会

26日 福岡県畜協第41回通常総会

27日 ゆうき青森農協第3回通常総会

静岡県開連第65回通常総会

佐賀県開畜協第46回通常総会

28日 開拓ながさき農協第4回通常総会

24日 全開連第8回理事

会 24~25日 全開連監事監査(岩手事業所・岩手畜産センター)



新茶料理を園児ら満喫

茶摘みも体験し、食に親しむ

春から夏へと移り変わる節目の日である「八十八夜」。今年は5月2日だった。そんな新茶シーズンを迎え、長崎県佐々町牟田原開拓の(有)北村製茶(北村親二代表)では、地元の保育園児らが茶摘み体験を行った。茶摘みだけでなく、お茶の新芽を使った料理を味わい、日本の農産物に親しむ食育の一環だ。

5月8日、地元佐々町の「ささなみ保育園」園児58人が同社茶園を訪れ、指導を受けながら、上手な手つきでお茶の新芽を摘み採った。

新茶の中でも、八十八夜前後に摘み採られた茶葉はとりわけ香りがさわやかで、旨味がのっとっても美味しいといわれている。同13日には、同社の北村誠さん(53、開拓2世)が当日摘み採ったばかりの新茶葉を同保育園に持ち込み(写真)、佐々町に隣接する佐世保市のシエフが、地元の野菜・魚とともに給食に調理。園児らは、新茶葉入りかき揚げやデザートプリンに大喜びで、われ先にとお代わりしていた。

北村製茶は、標高300m以上の超の開拓地で、40年以上にわたり農薬・除草剤、化学肥料を一切使わずお茶を栽培。01年には県内で初めて有機JAS認定を取得している。茶園や製茶工場などを積極的に公開し、茶摘み体験をはじめ、そうめん流しや、カキ氷、焼き芋、月見など盛りだくさんのイベントも開催。園内には、展望台や東屋、トイレも整備しており、年間3000人が訪れている。

見学などの申し込みは、電話0956-631-2707へ。

表 13年度上期 地域別生乳生産量(見通し)

	全国		北海道		都府県	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比
4月	651	100.2%	329	101.1%	322	99.3%
5月	674	100.5%	345	101.7%	329	99.2%
6月	644	100.4%	338	102.1%	306	98.5%
7月	638	99.0%	341	100.9%	297	96.9%
8月	619	98.3%	335	100.4%	284	96.0%
9月	600	99.3%	324	101.8%	276	96.6%
第1四半期	1,969	100.3%	1,013	101.6%	957	99.0%
第2四半期	1,857	98.9%	1,000	101.0%	857	96.5%
上期	3,826	99.6%	2,012	101.3%	1,814	97.8%

お知らせ

当協会にこのほど、戦後開拓関係資料が寄贈されましたので、ご紹介いたします。資料は、『戦後開拓とまつり』A4版、124頁。

植竹一男著 『私の歩んだ九十年』 B6版、65頁。

三幸町街づくり推進協議会発行 『戦後開拓とまつり』A4版、124頁。

なお、当協会では開拓関係資料を収集し、公開しています。ご提供いただける方は、協会まで一報ください。お願いします。

農業による事故の主な原因及びその防止のための注意事項

	原因	防止対策	
人に対する事故	農業散布前	<p>① 散布作業前日に飲酒または睡眠不足があったことによるもの、その他病中病後など体調の万全でない状態で散布作業に従事したことによるもの(ア、イ)</p> <p>② 農業用マスク、保護メガネ等の防護装備の不備、防除器具等の点検不備によるもの(ウ、エ)</p> <p>③ 通行人や近隣の住民への配慮が十分でなかったことによるもの(オ、カ)</p>	<p>ア 散布作業前日には、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。</p> <p>イ 体調の優れない、または著しく疲労しているときは、散布作業に従事しない。</p> <p>ウ 農業の調製又は散布を行うときは、農業用マスク、保護メガネ等防護装備を着用し、かつ、慎重に取り扱う。</p> <p>エ 散布に当たっては、事前に防除器具等の十分な点検整備を行う。</p> <p>オ 農業を散布するときは、散布前に周辺住民等の関係者に連絡し、必要に応じ立札を立て注意喚起を行うなど、子どもや散布に関係のない者が作業現場に近づかないよう配慮する。</p> <p>カ 農業散布区域の近隣に学校、通学路等がある場合には、当該学校や子どもの保護者等への周知を図り、散布の時間帯に最大限配慮する。</p>
	農業散布中	<p>① 炎天下で長時間散布作業に従事したことによるもの(ア)</p> <p>② 散布の途中に農業が付着した手で飲食・喫煙したことによるもの(イ)</p> <p>③ 強風中や風下での散布等散布者の不注意により、周辺の者や散布作業者が農業に暴露したことによるもの(ウ、エ)</p> <p>④ 土壌くん蒸剤の使用に当たって、揮散防止措置を講じなかったことによるもの(オ)</p> <p>⑤ 通行人や近隣の住民への配慮が十分でなかったことによるもの(カ)</p>	<p>ア 炎天下での長時間の散布作業は避け、朝夕の涼しい時間を選び、2～3時間ごとに交替して行う。</p> <p>イ 散布作業の合間には飲食・喫煙をしない。</p> <p>ウ 周辺への飛散を防ぐため、強風時における散布は控える。</p> <p>エ 風下からの散布、水稻の病害虫防除の際の動力散粉機(多孔ホース噴頭)の手持ち等はやめ、農業を浴びることのないように十分に注意する。</p> <p>オ クロルピクリン剤等土壌くん蒸剤の使用に当たっては、揮散した薬剤が周辺に影響を与えないよう風向き等に十分注意するとともに、直ちに完全に被覆する。</p> <p>カ 居住者、通行人等に被害を及ぼさないよう、散布時の風向きに十分注意する。</p>
	農業散布後	<p>① 散布作業後に飲酒又は睡眠不足があったことによるもの(ア)</p> <p>② 通行人や近隣の住民への配慮が十分でなかったことによるもの(イ)</p>	<p>ア 散布作業後には、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。</p> <p>イ 公園、校庭等に農業を散布した後は、少なくとも当日は散布区域に縄囲いや立札を立てる等により、関係者以外の者の立ち入りを防ぐ。</p>
	保管、廃棄	<p>① 農業の保管管理が不適切だったため、高齢者、子ども等が誤飲したことによるもの(ア～ウ)</p> <p>② 使用済農業を不注意に廃棄したり、不要になった農業を放置したことによるもの(エ、オ)</p> <p>③ 農業が残っている容器が適切に処分されなかったことによるもの(エ、オ)</p>	<p>ア 毒物又は劇物に該当する農業のみならず、全ての農業について、安全な場所に施設して保管する等農業の保管管理には十分注意する。</p> <p>イ 農業やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移替えない。</p> <p>ウ 万が一、農業を飲食品の空容器に移替えざるを得ない場合には、必ず商品のラベルをはがし、内容物が農業であることを明記する。</p> <p>エ 農業は計画的に購入・使用し、使い切るよう努める。</p> <p>オ 不要になった農業や空容器、空袋は、関係法令を遵守し、廃棄物処理業者に処理を依頼する等により適正に処理する。</p>
	その他の農業使用者のための一般的注意事項		<p>ア 農業ラベルの記載をよく読み、記載されている希釈倍数等の使用基準やマスク等防護装備等に関する注意事項を遵守する。</p> <p>イ 散布作業後は、手足はもちろん、全身を石けんでよく洗うとともに、洗顔し、衣服を取り替える。</p> <p>ウ 農業の散布によってめまいや頭痛が生じ、又は気分が少しでも悪くなった場合には、医師の診断を受ける。</p> <p>エ 初めて使用する農業などで、使用に関し不明な点がある場合は、病害虫防除所等に相談する。</p>
周囲の農作物、家畜等への被害	<p>① 周辺に飛散した除草剤により農作物が変色・枯死したもの(ア～オ)</p> <p>② 農業散布を行った地域やその周辺に置かれた巣箱で蜜蜂の斃死が発生したもの(ア～キ)</p>	<p>ア 飛散が少ないと考えられる剤型を選択する。</p> <p>イ 飛散低減ノズルを使用する。</p> <p>ウ ほ場の外側から内側に向かって散布するなど、ノズルの向きに注意する。</p> <p>エ 適正な散布圧力、散布量で散布を行う。</p> <p>オ 薬剤が周囲の圃場に飛散しないよう、風速や風向きに注意する。</p> <p>カ 蜜蜂に被害を及ぼさないよう、耕種農家は、巣箱の位置や設置時期に関する情報の提供を受けて、事前に農業使用の情報提供を行い、巣箱の退避や巣門を閉じる等の対策が講じられるよう促す。</p> <p>キ 養蜂が行われている地区では、蜜蜂の巣箱及びその周辺に飛散しないよう注意する。</p>	

農業危害防止運動始まる

周辺住民への配慮も

農水省などは、6月1日から「13年度農業危害防止運動」を始めた。期限は、原則として8月31日まで。

農水省などは、6月1日から「13年度農業危害防止運動」を始めた。期限は、原則として8月31日まで。

農水省などは、6月1日から「13年度農業危害防止運動」を始めた。期限は、原則として8月31日まで。

い。農業の使用者だけでなく、周辺住民や家畜、周辺環境などに対する被害も発生している。

とくに近年では、農業の使用地域周辺の住民などの健康におよぼす影響に対して、強く配慮が求められるようになっており、農業を安全かつ適正に使用することの必要が高まっている。

天候に恵まれ収穫増

12年産みかん・りんご

みかん

農水省はこのほど、「12年度産みかん・りんごの収穫量、出荷量および卸売価格」を公表した。

みかん

農水省はこのほど、「12年度産みかん・りんごの収穫量、出荷量および卸売価格」を公表した。

収穫量は84万6300ト、出荷量は75万7300トで、10年産に比べそれぞれ6万3000ト(8%)、75万7300ト(8%)増加している。

結果樹面積は4万4600ヘクタールで、生産者の高齢化にともなう廃園や規模縮小、他のかんきつ類への転換などが進んだため、10年産に比べ700ヘクタール(2%)減少した。

りんご

りんご

農水省は、「12年産りんごの収穫量、出荷量および卸売価格」を公表した。

りんご

農水省は、「12年産りんごの収穫量、出荷量および卸売価格」を公表した。

13年度適正生産量

みかん93万ト・りんご80万ト

農水省は「13年度産みかん・りんごの適正生産出荷見通し」を公表した。わが国の主要な果樹である温州みかん・りんごの需要にあつた生産と計画的な出荷をはかるために策定したものだ。

みかん

温州みかんの需要量は96万トと予想する一方、生産面では表年に当たるが、10年夏季の猛暑による樹への影響が残り、産地によって着花量がばらつきがみられることから、予想生産量は93万トの見込。裏年だった12年の見込。裏年だった12年の見込。裏年だった12年の見込。

りんご

りんご

りんごの需要量は86万トと予想する一方、生産面では主産県の青森と長野での2年連続の大雪による枝折れ被害の影響などにより、予想生産量は80万トの見込。12年産の生産実績と比べ1万ト程度増加する見込みとなるものの、予想生産量が予想需要量を下回るため、適正生産量は80万トとした。適正出荷量は71万1000トで、生食用6万2000ト、加工用10万9000トとした。

生産者や出荷団体などは、適正生産出荷見通しに基づき、生産出荷目標を策定し、計画的な生産出荷に取り組むよう求められている。

同省はこの見通しや近年の消費者の嗜好を踏まえれば、低品位果実では安定した価格が望めない高品質果実の生産に力をつけることが重要としている。

農研機構・果樹研究所

ナシ・リンゴ 白紋羽病の温水治療

早期に正確な病気診断を

ナシやリンゴなどの根を腐らせ枯らしてしまう白紋羽病は、糸状菌が原因で発病し、多大な被害が発生している。

農研機構・果樹研究所は、糸状菌が熱に弱いことに着目、労力も少なく環境にも影響が少ない土壌に温水を注入するナシ、リンゴの治療法マニュアルを作成・公表しているため紹介する。

病気の早期発見

病気を早期に発見するには、5～10月に、樹幹から10cm以内に地下25cmまでクワなどの枝を挿入(図1)し、20～30日後に抜き取り、糸状菌の付着の有無を観察し確認することが必要である。

温水治療方法の手順等は次のとおり。

1) 注入チューブの配置

治療する樹を中心に地表面の凸凹を

ならし、2m×2mの範囲にくし状(図2)または半径1mの範囲にらせん状(図3)に20cm間隔で注入チューブを配置する。

注入チューブは、市販の灌水用点滴チューブでよく、長さはくし状で約16m、らせん状で約25mとする。

2) 注入チューブを覆う

注入チューブは配置後、全面を農業用マルチフィルムなどで覆い、風などでめくれないよう重しで固定する。

3) 温水の送水と地温確認

50℃の温水を注入チューブに送水し、チューブの点滴穴から温水がでてくるか確認。

送水中は、防滴仕様のペン型温度計

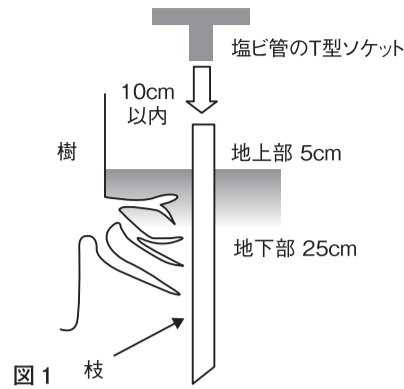


図1 枝

を使用し、地下10cmと30cmの深さの地温を3ヵ所ずつ確認する。

地温の測定場所は樹幹から30～50cmの範囲にある注入チューブの間とし、測定場所ができるだけ等間隔になるよう配置する。高温障害を避けるため、地下10cmの地温測定は必ず実施することが必要。

4) 処理の終了

以下の2つの温度条件を目安にどちらかの条件に達したとき送水を止め、終了する。

- 地下30cmの地温が、3ヵ所全て35℃を越えた時

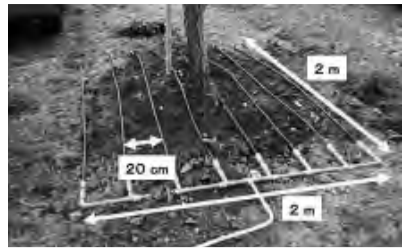


図2 くし状に配置した注入チューブ

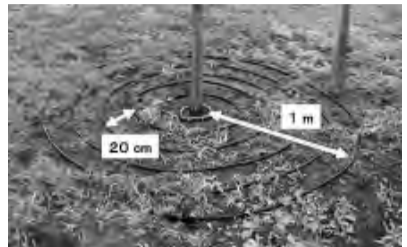


図3 らせん状に配置した注入チューブ

●地下10cmの地温が1ヵ所でも45℃を越えた時

なお、処理時期は、地温が比較的高い6～10月が効率的で、この時期の処理にかかる時間と水量は、くし状で約6時間(樹当たり水量900～1000ℓ)、らせん状で約4時間(樹当たり水量800～1000ℓ)としている。

マニュアルの詳細は、農研機構・果樹研究所のホームページにアクセスし参照のこと。

気温の高い6～10月が効率的



安価な細霧冷房システム 中山間地域のトマト栽培に

中山間地域のトマトの小規模経営では、採算性の面から、高価な細霧冷房施設装置の導入は難しい。既存の施設に付設でき、安価で効果的な冷房システムが求められていた。

農研機構・近畿中国四国農業研究センターは、細霧ノズル付循環扇を用い、噴霧量の調節を行い、夏季日中のハウス内の気温を外気温並みに下げ、トマトの収量・品質をアップするシステムを開発した。

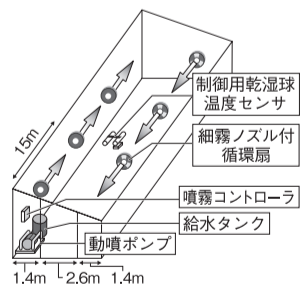
既存の通風用の循環扇に、噴霧ノズルを設置し、ホースで給水タンクと接続し、コントローラにより噴霧量を調節するシステム。農家自ら設置が可能で、部品点数も少ないことから維持管理も容易にできる。コストは100万円/10a程度で、大きな細霧冷房施設装置に比べ、50万円程度安くなる。

循環扇の数は、機械製造メーカーの試験によると、10a当たり12台が効率的であった。図のような2a程度のハウス規模であれば、片屋根型や一般的な丸屋根型など構造の違いを意識しなくて良い。

同センターでは、2aのパイプハウ

年	処理	トマト可販果収量(t/10a)			増収率(%)
		7～8月	9～11月	合計	
2010	細霧	6.10	6.04	12.14	14.6
	対照	4.54	6.05	10.59	
2011	細霧	6.77	6.70	13.47	4.5
	対照	6.70	6.17	12.87	
2012	細霧	7.36	6.86	14.22	13.0
	対照	6.48	6.10	12.58	

※品種：麗夏、養液土耕連続二段摘心栽培



現地片屋根型ハウス(間口5.4×奥行48m)への細霧システムの配置

ス2棟で、この細霧ノズル付循環扇を用いた区(使用区)と対照区(未使用区)のトマトの収量を10、11、12年の3年間で比較した。使用区は未使用区より5～15%の増収、とくに10、12年の夏の高温年には10%以上の収量アップであった(表参照)。トマトの表面がまだらになるなどの高温障害も出なかった。

新2品種、食味に魅力

早生「みはや」、やや晩生の「はるひ」

「みはや」

近年、温州みかんの価格低迷や隔年結果にばらつきがあるなど収量が安定せず、温州みかんに替わる早生カンキツの育成が望まれていた。

農研機構・果樹研究所は、11月から収穫・出荷ができ、食味の良い、カンキツ新品種「みはや」を育成した。

隔年で収穫量が比較的に違わず、早生で食味の良い「津之望」に外観美麗でやはり食味の良い中間母本「No.1408」を交配し、得られた実生から選抜。外観が「美」しく、「早」生であることから「みはや」と命名。「みはや」は11月下旬から成熟期を迎え、果汁の糖度は12%、酸含量は0.6%で、糖度が比較的高く、酸味の少ない品種で、「アンコール」に似た芳香があり、食味に優れている。

果実重は平均190g程度、果皮はなめらかで11月上旬には赤橙色に完全着色し、外観美麗で温州みかんと明確に区別できる。手で剥け、温州みかんで問題となる果皮と果肉が離れる浮皮は発生しない。苗木は、すでに販売されている。

「はるひ」

ヒュウガナツ系のカンキツは、独特の爽やかな風味をもつ晩生のカンキツ。宮崎、高知、静岡などで栽培が行われ、春から初夏にかけて出荷される。「小夏みかん」、「ニューサマーオレンジ」とも呼ばれ人気が高い。

農研機構・果樹研究所は、ヒュウガナツより早熟で甘味があり、ヒュウガナツ同様に爽やかな食味をもつ新品種「はるひ」を育成した。

食味が優れる「カンキツ興津46号」に香り爽やかな「阿波オレンジ」を交配し、得られた実生から選抜。

春の日の光のように優しい果皮色、甘く爽やかな食味のイメージ、ヒュウガナツより早熟で初夏よりおいしく食べられる「ハルヒュウガナツ」の語感から「はるひ」と命名。1月中旬から2月にかけて成熟、果汁の糖度は13%程度と高く、酸含量は1.0%程度。食味はヒュウガナツに似て爽やかで良好。

果実重は平均150g程度、果皮は柔らかく、皮むきが比較的容易。果肉は橙色で、やわらかくジューシー。苗木は、すでに販売されている。

広島県立総合技術研究所

泌乳中・後期牛に35%給与

たちすずか乳量・受胎率とも向上

飼料イネ新品種「たちすずか」は、栄養価に優れ、収穫ロスが少なく、発酵に適した特性を持つなど、稲発酵粗飼料として今後が大きく期待される。広島県立総合技術研究所は、「たちすずか」の泌乳中・後期の乳牛への多給試験と農家における給与実証試験の結果を公表したので紹介する。

1) 泌乳中後期牛への多給試験

平均分娩後日数293日の泌乳中・後期牛9頭を用いて、従来の子実型飼料イネWCSの給与上限である乾物中30%の「クサノホシ」を混合したTMR(混合飼料)A区、同じく30%の「たちすずか」を混合したB区、35%の「たちすずか」を混合したC区の3区(1区3頭)に区分し、試験を行った。それぞれの区の牛に14日間ごとに42日間で、A、B、CのTMRを平等に給与する方法を実施し(表1)、乾物摂取量、乳量等を比較、検証した。

なお、各区の栄養価を同じくするた

め、A区とC区に脂肪酸カルシウムと大豆粕を添加し調製した。

結果は、乾物摂取量、乳量、4%脂肪補正乳量、乳成分に差は認められず、B区は脂肪酸カルシウムと大豆粕を無添加で、他区と同等の泌乳成績が得られた。

「たちすずか」は35%の多給でも乾物摂取量、乳量および乳成分の低下が認められなかったことから、泌乳中後期牛に少なくとも35%の給与ができると考えられた(表2)。体重変化量はB区とC区がA区より大きかった。子実排泄量は、B区、C区ともA区の1/3程度だったことから、子実排泄量による栄養ロスが体重変化量の差に現れたと考えられた。

飼料費は、「たちすずか」の両区で乳量1kg当たり36円で「クサノホシ」の39円に比べ8%低減した。

2) 農家における給与実証試験

搾乳牛40頭規模の酪農家で、搾乳牛

表1 飼料構成と成分組成

飼料イネ	クサノホシ		
	30%	30%	35%
飼料イネ	30	30	35
濃厚飼料	70	70	65
DM%			
大豆粕(内数)	(0.4)	—	(3.0)
脂肪酸カルシウム(内数)	(1.8)	—	(1.0)
成分組成			
CP(粗タンパク質)	15.6	15.8	15.8
TDN(可消化養分総量)	76.2	76.1	76.1
EE(粗脂肪)	6.2	4.8	5.3
NDF(中性テタージェント繊維)	32.7	33.9	34.1
NFC(非繊維性炭水化物)	37.6	37.3	36.2
飼料費(円/乾物kg)	57	54	55

*TMRの成分組成は飼料イネのサレージの分析値および、日本標準飼料成分表を基に算出

表3 TMRの構成

飼料の種類	原物(kg)	乾物比(%)
たちすずかサイレージ	600	29.3
アルファルファ乾草	60	7.6
配合飼料	230	29.6
ビール粕(生・脱水)	300	15.5
圧ベントウモロコシ	80	10.2
綿実(1~3月まで)	30	4.1
トウワブ(生)	30	0.9
大豆粕	20	2.6

全頭に「たちすずか」WCSを乾物比で飼料全体の23%程度、5ヵ月間給与し(表3、表4)実証試験を実施した。

「たちすずか」TMRは嗜好性が良く、クサノホシなどを給与した前年同時期と比較し、牛群平均乳量は2.0kg/日増加し、305日推定乳量は896kg増加した(表5)。泌乳ピーク乳量は4.6kg高くなり、乳成分は適正範囲で安定推移した。

試験期間中の受胎率は、37.9%で前年同期の29.4%より8.5ポイント高く、繁殖成績に改善がみられた(表6)。

「たちすずか」WCSの給与により乳量、乳成分、繁殖成績は良好に推移することがわかった。

表2 乾物摂取量および泌乳成績

	クサノホシ			たちすずか		
	30%	30%	35%	30%	30%	35%
乾物摂取量(kg/日)	22.4	22.7	22.4	29.4	30.9	29.7
乳量(kg/日)	29.4	30.9	29.7	32.8	33.9	34.1
4%FCM量(kg)	32.8	33.9	34.1	32.8	33.9	34.1
乳成分						
乳脂率(%)	4.77	4.63	5.02	4.77	4.63	5.02
乳蛋白質率(%)	3.71	3.76	3.71	3.71	3.76	3.71
乳糖率(%)	4.60	4.60	4.58	4.60	4.60	4.58
無脂固形率(%)	9.30	9.37	9.30	9.30	9.37	9.30
乳汁中尿素窒素(mg/dl)	10.7	11.5	11.7	10.7	11.5	11.7
体重変化量(kg)	-4 ^b	18 ^a	14 ^a	-4 ^b	18 ^a	14 ^a

異符合間に有意差(p<0.05)

表4 飼料給与と設計

乳量(kg)	25	30	35	40	45
原物給与量(kg)					
たちすずかTMR	30	33	35	37	40
チモシー乾草	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3
庄ベン大麦	0	0	0	1	1
配合飼料	3	4	5	5	6
粗飼料割合(%)	35.6	34.2	33.0	32.0	31.2
たちすずか給与割合(%)	4.4	4.8	5.1	5.8	6.1
たちすずか給与割合(%)	23.5	22.9	22.3	23.2	22.7

飼料の養分含量(乾物中%)					
CP(粗タンパク質)	15.8	16.0	16.1	15.9	16.0
TDN(可消化養分総量)	74.5	74.9	75.3	75.5	75.8
EE(粗脂肪)	4.6	4.5	4.5	4.4	4.4
NDF(中性テタージェント繊維)	33.1	32.3	31.7	31.4	30.9
NFC(非繊維性炭水化物)	38.6	39.1	39.5	40.3	40.5

表5 泌乳成績

	実証期	前年
平均産次(次)	2.8	3.2
平均泌乳日数(日)	256	254
牛群平均乳量(kg)	31.3	29.3
305日乳量(kg)	10056	9160

*305日乳量は2点法泌乳曲線で推定

表6 繁殖成績

	実証期	前年
受精実頭数(頭)	19	18
受精回数(回)	29	34
1頭当り受精回数(回)	1.5	1.9
受胎頭数(頭)	11	10
受胎率(%) (受胎/受精回数)	37.9	29.4

福島県農業総合センター

糖度計で乳房炎を推察

Brix値25%が発症の目安

分娩前に乳房炎を推察し、対処できれば生産性は大きく向上する。昨年、本紙5月(第649)号で、分娩前の乳汁性状とCMT変法(PLテスト)により乳房炎を早期判断する技術を紹介した。しかし、目視による判定のため、判断に迷うことがあった。

福島県農業総合センターは、デジタル糖度計(写真下)を利用した推察および分娩前治療効果を検証し、公表したので紹介する。

分娩前乳汁の性状(写真上)がアメ状であるものは、糖度計のBrix値が30%以上だった。分娩後に乳房炎を発症した6頭の前分娩乳汁は、水様または初乳様で発症した分房

図2 分娩前乳汁性状(アメ状、水様、初乳様)

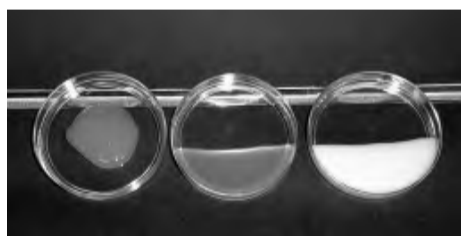


図1 糖度計



のBrix値は25%未満に偏在(図3)していた。

分娩前乳汁のBrix値の最低値が25%未満の分房をもつ牛は、分娩後、体細胞数が7万/ml以上になることが多かった(図4)。

一方、分娩前乳汁の最低値が25%以上の牛は分娩後、体細胞数が少なかった。

また、分娩前乳汁の性状が水~初乳様でBrix値25%未満の牛に、薬剤

感受性を確認した乳房炎軟膏による分娩前治療により体細胞数を抑えることができた。

以上のことから、分娩前の乳汁性状がアメ状ではなく、Brix値25%未満の場合、分房乳の細菌検査に基づいた分娩前治療を行うことで、分娩後の乳房炎発症を抑制できることがわかった。

なお、検査を行う場合、乳頭をきれいにふき、乳汁採取後は細菌汚染を防ぐためディッピング液で消毒することが重要である。

図3 分娩前乳汁の性状とBrix値

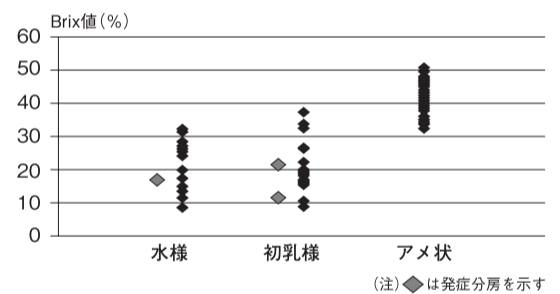
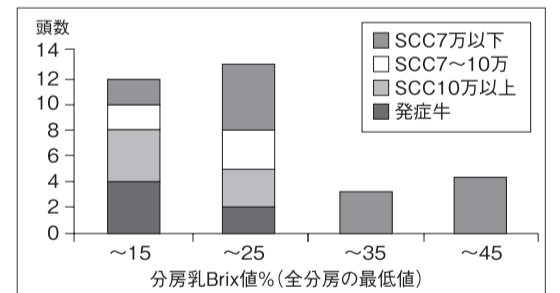


図4 分娩前分房乳Brix値と分娩後の体細胞(SCC)



農水省

食鳥流通統計

生産出荷調整の施策に活用

農水省は、12年の食鳥流通統計を公表したのでその概要を紹介する。

「肉用若鶏」の処理羽数は6億4963万羽、処理重量は188万9158tで前年に比べ、それぞれ5.3%、5.9%増加した。都道府県別出荷羽数割合を

みると鹿児島県が20.0%ともっとも高く、次いで宮崎県が18.9%、岩手県が16.7%で、上位3県で約6割を占めている。

「廃鶏」の全国の処理羽数は9066万羽、処理重量は15万9691tで、前年比、それぞれ2.0%、3.7%増加している。

「その他肉用鶏」の全国の処理羽数は823万羽、処理重量は2万6021tで、前年比でそれぞれ2.8%、4.5%増である。都道府県別出荷羽数割合は、徳島県が24.3%ともっとも高く、次いで兵庫県10.8%、愛知県7.9%、福島県7.2%で、上位4県で約5割を占めている。

検査前後の乳頭消毒を

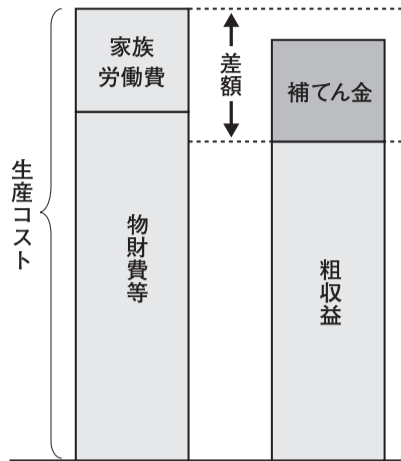
養豚経営安定対策事業補てん金 新算定方式で交付

養豚経営安定対策事業は、13年度から1頭当たりの生産コストと粗収益を四半期ごとに算出し、粗収益が生産コストを下回った場合、差額の8割を補てんする算定方式に変更された(図)。

肥育牛の採算割れを補てんする新マルキン事業をもとに設計したもの。

豚枝肉価格は季節変動が大きく、四半期に補てんがなかった場合、次の四半期と通算して生産コストと粗収益を算出し、補てん金額を計算する仕組み。また、生産者の資金繰りを支援するため概算払いが導入された。4~6月分であれば、8月末の交付を約3週間早く8月上旬に交付する。

概算払いは、各四半期の最終月の枝肉価格の概算値を設定、その概算値+5円/kgで補てん金が交付され、確定後に精算する方式となっている。



粗収益が生産コストを下回った場合に積立金から差額の8割を補てん
(注) 四半期終了時に計算(当該四半期に発動がなかった場合は、次の四半期に通算して計算)

概算払いを希望する者は、販売実績の報告や積立金の納付前倒しで行う必要がある。13年度の生産者積立金は、1000円/頭で国も同額の積立額となっている。

一石二鳥の笹サイレージ 未利用資源の竹を活用

宮崎県畜産試験場は、竹と竹葉を主原料とした粗飼料「笹サイレージ」を開発。地元の役場、団体との協力のもとに、竹粗飼料の実用化に取り組んでいる。

竹の幹部分を粉末化し添加剤として利用した事例は多くあるが、これらとの違いを明確にするために、「笹サイレージ」と名付けているという。

「笹サイレージ」のメリットと特徴は、竹害をもたらしている竹の駆除が効果的に行なえ、未利用資源の竹をサイレージに活用できること、牛の嗜好性が良いこと、稲わらと比較してタンパク質の消化性が高いこと、脂肪中のオレイン酸の割合が高くなり、血中の抗酸化能が上がることなどがあげられる。

また、栄養分析の結果、稲わらより粗タンパク質、TDN(可消化養分総量)、DCP(可消化粗タンパク質)、CF(粗繊維)の全てにおいて高かった。

12年5月から13年1月にかけて、給与試験を実施。給与期間は、繁殖雌牛が14日、子牛が5ヵ月、肥育牛(経産牛・平均10歳)が3ヵ月。繁殖雌牛、子牛、経産牛の3試験とも試験区(笹サイレージの使用)に3頭、対照区(従来の粗飼料給与)に3頭、計18頭での試験。その結果、「笹サイレージ」使用区は、体重や栄養状態で対照区を上

回るか同等であった。
コスト面で見ると、牛のエサとして竹を伐採し、サイレージを調製すれば、コスト高になる可能性があるが、駆除した竹を充当できれば安くなる。

開発者は、「笹サイレージを食べた牛の牛肉、地元の竹を食べて育った牛、オレイン酸の豊富な牛肉、笹ビーフなどのストーリーをもたせ、地域ブランド化も期待できる」と話している。

なお、地元において6次産業化の取組みがスタートしている。

今年は雨が少なく高温 家畜の暑熱対策を万全に

気象庁の予報によると、今年の夏は、全国的に降水量が少なく、暑くなりそうだ。人間には熱中症の注意が呼びかけられているが、家畜にとっても、暑さは大きなストレスになる。家畜の増体や乳量などの生産性を低下させないために、暑熱対策を徹底したい。

体感温度を下げる

家畜が快適に過ごせる体感温度を、適正に保つことで生産性低下を防ぐ。密飼いをやめ、家畜に直接送風したり、水を噴霧して体感温度を下げる。

畜舎の温度をさげるには、遮光ネットなどで日除けをしたり、畜舎の屋根に石灰を塗布し、畜舎環境の改善をはかる。

飼料は涼しい時間帯に与え、回数を増やすようにする。良質で消化率の高い飼料を与え、不足しやすいビタミンやミネラルを適時補給する。また、冷水を十分飲めるようにする。

日射病・熱射病では食欲不振、体温上昇、呼吸促進、開口呼吸、脱水症状などが見られるので涼しい日かげに移動させ、冷水を頭部や全身にかけ、十分に水を飲ませる。症状の重い時は獣医師による治療を受ける。

低コストで高効果な事例

中央畜産会がとりまとめた暑熱対策リーフレットから有効な事例を紹介する。

肥育牛舎の屋根への石灰塗布では、石灰(牛舎消毒用)を水に溶かし石灰乳を作り、動力噴霧器で屋根に散布塗

布する。
塗布作業を5人で行った場合、800㎡を2時間で完了した。

石灰塗布は、塗布前に比べ、舎内温度を5℃下げる効果があった。夏場の採食量が増え、枝肉重量がアップし、出荷成績の改善となった。

注意点は、石灰乳がダマにならないように良くかき混ぜ、ムラなく、ていねいに塗布すること。

アカザを利用した鶏舎の日除けは、畑に自生するものを利用、鶏舎の東・南側に植えた。アカザの成長は早く、夏季には屋根まで覆い、鶏舎内には日かげをつくった。夏が終わると枯れ、後かたづけも簡単だった。日除けの実施後、夏季の死亡羽数が前年より減少した。

注意点としては、鶏舎内の風通しを良くするため、アカザの下部の枝や葉を切りそろえるなどの手入れをすること。

無理のない範囲で節電対策を

節電はコスト削減や経営改善につながるが、無理のない範囲で実施することが大切。

日ごろからできることとして、使用していない電気機器のプラグをコンセントから抜いたり、空調機器のフィルターは、2週間に1度は清掃することを心がけたい。

農畜産業振興機構は、13年4月分の肉用牛肥育経営安定特別対策(新マルキン)事業の補てん金単価を公表した。

3月分と同じく交雑種と乳用種の2品種で補てんが行われる。1頭当たり補てん金は、交雑種で3万8700円、乳用種で6万3900円となった。

補てん金単価を3月分と比較すると、交雑種・乳用種とも、生産費総額が増加したものの、粗収益がより増加したことで、それぞれ7100円、1700円減となった。

4月から導入された地域算定方式により、肉専用種で熊本県と鹿児島県が発動され、それぞれ1万9200円と1万200円となった。

新マルキン、全国2品種で交付

地域算定、熊本・鹿児島で発動

全国

肉専用種 (地域算定県を除く)	交雑種	乳用種
—	38,700円	63,900円

地域算定県(肉専用種)

広島県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	鹿児島県
—	—	—	—	19,200円	10,200円

畜産物需給見通し

牛枝肉

出荷頭数減で品薄、相場は底堅いか

5月は、全国的な出荷頭数の減少で、予想を上回る高値となり、全品種で前月相場を上回った。

6月は、梅雨で消費が鈍る時期だが、全品種で出荷頭数の減少が続き、相場は高値を維持すると見込まれる。

【乳去勢】5月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3は846円(前年同月比131%)、B2は775円(同135%)となった。前月に比べそれぞれ19円、24円上げた。

農畜産業振興機構は、6月の乳牛全国出荷頭数を3万400頭(同94%)、輸入量を4万6400t(同100%)と見込んでいる。乳去勢の出荷頭数減が続いている。月齢制限が緩和された米国産の輸入量は、円安などの影響で大幅には増加しないとみられる。よって、相場は底堅いと見込まれる。

【F₁去勢】5月の東京市場F₁去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1214円(前年同月比110%)、B2は1113円(同111%)となった。前月に比べそれぞれ24円、21円上げた。

農畜産業振興機構は、6月の全国出荷頭数を1万6200頭(同92%)と見込んでいる。和牛の2等級、3等級の高値から代替需要が見込まれる。

全品種で出荷頭数減

【和去勢】5月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が1917円(前年同月比116%)、A3は1778円(同121%)となった。前月に比べそれぞれ78円、93円上げた。消費者の低価格志向から、A3、A2の引き合いが強かった。

農畜産業振興機構は6月の全国出荷頭数を3万7300頭(同90%)と見込んでいる。出荷頭数減から、引き続き3等級を中心に引き合いが強いと見込まれる。

総務省公表の家計調査報告によると、牛肉消費は回復基調にある。梅雨に入ると、例年だと消費が鈍り、相場が緩むが、今年は全品種で出荷頭数が減少するため、影響は少ないと考えられる。

このようなことから、向こう1ヵ月、乳去勢、F₁去勢、和去勢ともに底堅い相場が予測される。

大阪市場乳去勢の1kg当たり平均税込み単価は、B3が800~850円、B2は750~800円。東京市場の1kg当たり平均税込み単価は、F₁去勢B3が1200~1250円、B2は1100~1150円、和去勢A4が1850~1900円、A3は1750~1800円での展開が予測される。

5月の子牛取引状況 (単価: 頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	342	317	288	294	110,827	111,319	385	379
	F ₁ 去	1,155	1,438	314	314	308,858	301,813	984	960
	和去	1,778	1,667	306	306	504,715	516,968	1,652	1,691
東北	乳去	4	5	195	258	30,713	65,310	158	253
	F ₁ 去	2	24	236	268	101,850	226,056	432	845
	和去	2,805	2,579	305	304	489,504	508,666	1,604	1,673
関東	乳去	59	51	275	264	95,034	97,217	346	369
	F ₁ 去	175	188	294	299	270,953	268,202	920	897
	和去	748	918	277	270	496,535	492,833	1,791	1,824
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	1	-	133	-	352,800	-	2,653	-
東海	乳去	51	64	304	296	120,338	128,149	396	433
	F ₁ 去	38	172	299	293	278,802	272,408	931	929
	和去	297	404	262	273	547,930	546,725	2,092	2,004
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	177	383	249	258	435,690	452,294	1,750	1,755
中四国	乳去	158	148	265	268	114,144	101,949	431	380
	F ₁ 去	248	244	271	269	279,893	261,953	1,032	972
	和去	450	894	288	284	485,563	471,731	1,684	1,659
九州・沖縄	乳去	88	48	299	284	127,682	110,250	427	388
	F ₁ 去	369	558	296	289	283,255	261,494	958	905
	和去	10,948	8,507	283	285	503,216	499,894	1,778	1,756
全国	乳去	702	633	284	284	112,593	109,249	396	385
	F ₁ 去	1,987	2,624	303	302	296,366	284,504	978	942
	和去	17,204	15,352	288	288	500,451	501,204	1,738	1,740

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

枝重追求に盲点

皮下脂肪厚に注意

東京食肉市場に出荷される交雑種の頭数が減少していることから、枝肉相場は堅調に推移している。

枝肉相場が高くなったといっても、肥育農家の経営は依然として厳しいのが実状だ。そのため売上げを伸ばそうと、枝肉重量を大きくする傾向にある。

同市場がとりまとめた12年の交雑種去勢の枝肉重量と単価の関係をみると、枝肉重量500~550kgで単価がもっとも高い傾向にあった。

枝肉重量500~550kgは、3等級で

500kg未満より19円、550kg以上より13円それぞれ高かった。2等級も同様の傾向だった。

むやみに枝肉重量を大きくしようとすると、皮下脂肪が厚くなり歩留等級を下げる要因となる。同市場での直近1年間のB等級とC等級の価格差をみると、3等級間で76円、2等級間で71円もあった。

肥育経営にとって枝肉重量を大きくして売上げを伸ばすことは大事だが、枝肉重量の範囲を500~550kgに抑え、無駄な皮下脂肪をつけないようにすることも重要である。

肥育の仕上期になって配合飼料を食い込んだ牛は、皮下脂肪が厚くなる。枝肉重量の増大をはかるときは、肉張りが良く、皮下脂肪を多く乗せないような飼料給与を心がけたい。



豚枝肉

1日当たり出荷頭数減、輸入量減で相場堅調か

5月の東京食肉市場豚枝肉平均単価(税込)は、上物が525円(前年同月比113%)、中物は482円(同115%)となった。前月に比べそれぞれ57円、47円上げた。円安などの影響で輸入冷凍品のウデ、モモの不足による代替需要と量販店の特売需要が高値の要因と考えられる。

農水省食肉鶏卵課によると、全国出荷頭数を6月130万頭(同100%)、7月135万頭(同103%)と予測している。1日当たりの頭数は、6、7月とも5

月より減少する。

農畜産業振興機構は、6月の輸入量を5万7500t(同103%)、うち冷蔵2万1800t(同104%)、冷凍3万5700t(同102%)と予測している。

この時期は、例年出荷頭数が減少し、価格が上昇する傾向がある。加工向けの輸入冷凍品の減少傾向は続くともみられ、国産牛肉相場の高値で豚肉へのシフトも見込まれる。

このようなことから、向こう1ヵ月の相場は堅調に推移するか。東京食肉市場1kg当たり平均税込み単価は、上物が510~530円、中物は460~480円の展開か。



素牛 スモール・素牛ともに品薄、高値で推移か

【乳素牛】5月の素牛価格は(左表)、の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が11万2593円(前年同月比132%)、F₁去勢が29万6366円(同118%)となった。前月に比べ乳雄は3344円、F₁は1万1862円上げた。全国的な素牛頭数の減少を反映して、高値となっている。

家畜改良センターがまとめた個体識別情報集計データによる飼養頭数は、両品種とも減少傾向にある。素牛不足の状況が続き、品薄となりそう。乳去勢、F₁去勢とも、枝肉相場が底堅いと見込まれることから、素牛相場も強含みで推移するか。

【スモール】5月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が

5万6289円(前年同月比131%)、F₁雄が16万2058円(同126%)となった。前月に比べ乳雄は291円下がったが、3月から5万円台が続いている。F₁雄は2699円上げた。年初から取引頭数が前年同期を下回って推移し、高値が続いている。

両品種とも品薄感と枝肉相場が底堅いと見込まれることから、高値の相場が続くと考えられる。

【和子牛】5月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は50万451円(前年同月比116%)で、前月に比べ753円下げた。年初から高値が続いていたが、ようやく落ち着いた形だ。今後、出荷時期が牛肉需要期を外れていくが、恒常的な素牛の品薄感と枝肉相場が堅調なことから、素牛相場は横ばいが予測される。